

Title	ドウ・モルガンの「東方の史前」(二)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.69(577)- 78(586)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ドウ・モルガンの「東方の史前」(二)

## 第五章 スリーズ第二期土器

スリーズの第一都市の遺物を包含する層の上部數米の地點に上述した土器と甚だ相違した土器を發見した。その粘土は粗く、やゝ厚手で、色はもつと滷り易く、美しさ劣り、黑色無艶で薄く、屢々赤朱又は暗緋色之に加はり、亦は奇麗な赭土から製作されてをる。幾何學的の裝飾に於ても線は不規則となり、纖細さを失つてをり、模様は、動物圖多く、筆先で粗雜に書かれてゐるが、第一期のそれの如く様式化せず、もつとしなやかで、自然的である。恐らく此時代政治的の大變動が起り他種族が、此丘陵に移り住んだためかゝる變化が起つたのだらうと思はれるが、然しながら新侵入者

は、在來の下地をあまり變更せず、たゞ少し様式を改め、同様の文明を顯現したに過ぎぬ。圖中にはカルデア風の衣裳をつけし人像あり、水鳥の群れる沼澤内に牝牛の草食む徹頭徹尾カルデア・エラム式風景あり、スリーズの原始藝術がカルデアより來れる文化の影響を蒙りたりと推斷することは合理的である。

スリーズ第一期土器は、世界の何れの地にも類例を發見し得ぬに反し、第二期土器は、エラムに於てハムラビ時代まで持續し、クウラチ、バルチスタンに於て現在まで行はれ、世界陶業史の上に極めて重要な役割を演じたのである。

彩色土器の起原地は、世界に僅か二箇所しか發見されぬ。一は近東で、スーリアンとエジプトが

その先後を争ふてをり、一は遙かに後世アメリカ中央におけるものである。近東に於ける陶器の諸流派は、一元に歸し、スーズの古代土器は、年代順より云へば最も先頭に來るものであるが、然し之も二次的のもので、眞個の搖籃地は未だ知られてゐない。

### 平印

第二期彩色土器と共にエラム地方にやがては歴史文化につながるべき文明が現れた。原スーズ人は、平印を既に第一都市の時分より使用してゐた。雪花石膏アルバートルまたは石灰石の球で、一方の面が平たく、他面が幾らか膨んでをり、穴があいて垂れ下げるやうになつてをる。平面には動物や幾何學的圖案や單純な點が先のとがつかた金屬彫刻器や鑿で刻されてをる。かゝる印判は、恐らく象形文字の出現した以前に使用されてゐたらしい。

### 圓筒

スーズに於て發見された最古の圓筒シリンダーは下部に二牛を畫き、上部に不明の象形文字を刻してをる。是が象形文字の存する唯一の印であるが、その外平印に刻された圖に似た人體又は動物圖を粗雜に表した多くの無文字の圓筒發見され、平印

と文字使用普及時代との過渡期を表してをる。

### 文字

エラムにはごく古代に二様式の文字が存した。一つは著しく本來の象形文字の影響を保有した原始エラム文字で、一つは象形文字から出たのではあるが、もつと發達した楔形線狀文字である。兩様式は、本來一つの原始的繪文字から分岐發達したのかも知れぬが、兩方が相互獨立して進化したに相違ない。即ち初期に於て二つのことなつた中心、カルデアとエラムのそれが存在し、エラムの方は彩色土器とその文字とを主要特色としてをり、カルデアの方は楔形線狀文字を特色としてをつた。兩地域に於て文字が發生したのは、極めて攸久の昔、スーズ第一都市より以後、吾人の手に残れる最古の文獻作成時代より以前、丁度第二期彩色土器の使用されてゐた極めて長期間の後半に當る。

### 堅牢實の細工

第一都市の原スメル人は、既に先のとがつか彫刻器や原始的の轆轤を使用して小さい石の器ウツバを製造してゐたが、かういふ知識は漸次進歩し、轆轤を使用し、鑿や摩擦で補はれた

多少堅牢質の器のみならず、動物を刻み表せる小形の容器、小像、小浮彫なども製作するやうになつた。かくて最初は幼稚であつたが、後に所謂カルデア様式の中に包含される彫刻藝術が、徐々として芽生えてきた。多くは柔い雪花石膏よりなり、ついで一層堅い石灰石、堅剛な砂岩、結晶質岩石に刻まれた。

**金屬** 此長期間に金屬使用が普及し、青銅が現れてきたに相違ない。然しスーズに於ては第二期彩色土器の下層におぼろげな痕跡が認められるばかりで、ナラム・シンの時代にならぬとその存在が確實とならぬ。

**彫り込み土器** 都市の平面より第二期彩色土器の上層まで各層に粗末な壺や切り込みある土器の斷片が発見された。その製法は、中央、西方ヨロツバの新石器時代、ペルシアの銅、青銅器時代の墳墓中に発見されるものとよく類似してをる。是は日常普通に使用せられしもので一時代固有のものともみるべき特殊性を有さぬ。

スーズ衛城丘陵最下層の發掘は、史前のエラム

ドゥ・モルガンの「東方の史前」(松本)

文明を闡明するため極めて重要な資料をもたらし、たがこの材料は、ゴウチエ、ラムブル兩氏のテペムーシアン平原の調査によつて補足された。

**テペムーシアン** スーズの北西八十キロメートルばかり離れ、ケビル・クウの谷が横はつてをる。古へは此處に湖水あり、水が迸出し去つてから沖積土からなる平原が生成されたのである。往古此處に稠密な住民が生息し、今日高低種々の小丘——古代村落地を發見する。その最も重要なものがテペ・ムーシアンの小丘である。平原の殆ど中央をしめ、その周圍にテペ・カジネ、テペ・アリアバド、テペ・モハメド・ジャフアルなど幾多の小丘が散在してをる。

テペ・ムーシアンから發見された主なる發見物中には、第二期エラム彩色土器の末期に屬するらしい黒環模様ある赤い水筒形土器あり、丘の底部には第二様式の彩色土器の破片を多く見出した。平原と接して燧石器等を包含する層あり。その上に土の緻密な第二様式土器が發見され、約五米の高さに土性、製法共に粗悪な彩色土器が青銅器と

共に出土する。歴史時代は此層に始まるのである  
**テペ・カジネ** 此地には種々の極めて古代様式  
の墳墓が発見された。礫の堆積と矩形の墳墓と  
二種あり、後者の底部、下層は積石よりなり、壁  
は生煉瓦よりなつてをる。葬具は赤黒の彩色あり  
動植物を畫ける壺、黄色陶土の無裝飾瓶、及び瓶  
臺、石鉢、雪花石膏アラバスターの小壺からなり、武器と混じ  
て雜然と壁に沿ふて排列されてをる。武器は、戟  
や槍先や投槍の尖端等からなり青銅である。

テペ・アリイ・アバドの墳墓は、雜多の形式か  
らなつてをるが皆生煉瓦で築造され、種々の遺骨  
も発見された。テペ・モハメド・ジャファルの墳  
墓からは粗製土器の破片と多數の燧石器が見出さ  
れた。

テペ・ムーシアン及び附近より出土する雜多の  
遺品はスーズ第二期土器時代のものと大體同様で  
ある。各層から燧石器、ことに鎌の部分、それか  
ら石槌、石斧等を発見してをる。

**土器** 土器には三つの區別があり、第一の古  
代のものは、輓轡の助けなく、手作りであり、つ

いで土の緻密な彩色土器、やゝ粗い彩色土器が存  
する。ムーシアン地方になされし觀察はスーズの  
相對的年代觀を確證した。即ち地表と接して燧石  
器、その上に幾何學的裝飾ある土の緻密な土器あ  
りその上部に土の粗なるまゝ多色の土器が青銅と  
共に出る。たゞムーシアンにおいては第一様式土  
器と第二様式土器が住居地遺物の中に混在し、第  
二様式土器は主として墳墓の中に発見されしに反  
しスーズに於ては第一土器は墳墓の中に発見され  
る然し兩所に於て他の出土品が全然符合し、スー  
シアン全體に同質文明の普及せることを立證して  
をる。

#### カルデアに於ける金石併用時代の工作

スーズと同様の文明が、大英博物館のホル氏によ  
つてユーフラト下流の西岸シユール地方ムーグ  
アイル(ウール)、テル・アブー・シャールレーン(エ  
リドゥ)に発見された。アブー・シャールレーンの  
小丘の基部からスーズに於けると同じやうに磨製  
石器、燧石器、黒曜石器、純銅器、同時にスーズ  
第二期土器に似た彩色土器の多數の破片を含む層

が發見された。然し未だカルデアにはエラムの原始土器の痕跡を發見しない。著者も一八九九年にシャト・エル・ハイの北なるヨクアの丘の基部に數千の燧石器、石核 *nuclei*、擊石 *percuteurs* を包含する層を發見した。燧石が少いので石器はごく小さい。小なる石鑿とか石錐とか背のかけた小石刀、鎌に使用された石鋸などからなつてゐた。それと一緒に粗製陶器、原始土器の斷片が澤山發見されたが、彩色土器の痕跡は認められなかつた。かういふ層は所々カルデアの小丘の基部に於て旅行者によつて發見された。かゝる層と歴史時代との間に長い期間が経過し、その間スーズに於ては古代彩色土器が第二期技術に移り變つてゐたのである。ついでカルデアに於て紀元前五千年紀ウルの第二王朝の文書と共に歴史時代が到來した。ウル・ニナの時代に於ては武器と道具は純銅で造られ、鉛と銅との合金は小像製作に用ひられた。文獻によれば銅は原産地から加工され、又は加工なし得る棒として到來した。政府が之を輸入し倉庫に貯藏し、需要者は、其處に居つて交付を受

けたのである。

銀は同様使用されてゐたがごく少量で環の形で商業に使用されてゐた。金はブル・シンの時代に極めて稀れであり、ニツプルでは銀の十倍に相當した。後ギミル・シンの時七倍になつた。是は主として細工物に利用されてゐた。錫は、所見なく鐵は極めて少量で、非常な稀品と考へられてゐた。金屬の細工はカルデアに於て既に稍完成の域に達してをり、寶石を裝身具、武器の柄、家具の金屬的裝飾中に鑲め、金を銅や銀の品に被せた。然し鑲著法は未だ知られてゐない。

#### スークナとアイン・タル(アレツブ)

カル

デアの低原を去つてメソポタミイの北西に上ると多くの地點に磨製石器の遺跡に遭ふ。その中著者は一九〇〇年にスークナの遺跡を調査した。またアイン、タルの遺跡に於ては多くの爐址とその周圍に澤山の燧石器、削り器、錐、削片、磨製の小斧、及び鋏、兩身の鋸、鎌の部分、手押し臼を發見した。この遺跡の發見者は、これを新石器時代のものとするが自分は寧ろ金石併用時代のものとする

見たい。シリアその他の遺跡の例をとつてもその出土品は他地方の金石器併用時代のものに似かよつてをる。殊に鎌の存在することは穀物の栽培、定居生活を意味してをる。この生活法こそ、カルデア、スーリアン、ルーリスタンに於ける最初の移住民の生活法で、此移住民が、實に銅の知識を此地にもたらしたのである。

### スーズ第二期土器の傳播

上述した如くスーズ第一期土器は、エラム特有であるが、是が恐らくはカルデアの影響を受けて、變化し、新しい流派を生じた。この時代に二様の文字が生まれ、その中楔形文字が、原始エラム文字を壓倒したのである。丁度それがエラムで土器の裝飾の終局期である。この間は、極めて長く、その中に此土器は近隣の地方に傳播し、地方々に攸久の古へから行はれてゐた素朴な土器と一緒になつて用ひられた。

第二期スーズ土器の中心地はエラムであり、恐らくはまたカルデアの或地方であつた。ルーリスタン、バクティアリスの谷至る所の小丘に此式の

土器の斷片を發見する。なほ遙かにペルシア高地に於てもその痕跡を見出し得るし、バンペリーの發見によればトランスカスピアンまでもこの技術が及んでをる。今日なほ印度のクウラチに於て此式の壺を輻輳を使用し製作してをる。

インダス河口の土器が、スーズのその後裔であると斷定するには地上か海上かの交通路が存してゐたことが證明せられねばならぬ。バルウチスタンには同地に邑居始まつて以來此式の土器が行はれてをる故陸路の此文化を普及せしめしことは推定される。

著者は海上交通の存否を知るためモリス・ペザルをしてペルシア灣の海濱を調査せしめた。ペザルは各所にスーズ第二期に屬する土器の破片を發見した。これは遺跡の各層に存するがことに中央及び最深層に多い。是等の壺は幾何學的圖形のみを有し、動物の圖を見ない。前者は後者より稍遅れて現はれ、長期の間エラムで相並行して共に行はれ、後に動物圖に對する趣味がなくなつて幾何學的裝飾のみがその技術と共に保持されたので

ある。

スーズ及びテペ・ムィシアンに於て生物の模様を使用したのは第一土器の製作者の趣味の遺存に過ぎぬ。之に伴ひたる幾何學的裝飾が最後に全く他を壓倒し、ついで東方に傳播したのである。地中海東部地方に彩色土器が傳播したのも比較的後期恐らく紀元前三千年紀と考へられる。彩色土器が到達した最後の境界は、現在の知識ではアナウトクウラチである(註一)。

アナウの發掘者バンペリイは、その遺跡を八千年紀まで遡らしめ、トランスカスピアンがスーズ土器の起原地であると考へてをるが、自分はシュエミットの意見に與し、寧ろ西方の文化がこの遺跡に影響したと考へ、アナウの最も古代の層を紀元前三千年紀、第三層を前一千年紀と比定する。

北部及び西部メデアに於てはごく漠然たる極めて疑はしいスーズ土器の影響の痕跡を見出すのみである。

スーズ土器の影響がアララト地方まで伸び、カウカサス山脈を横切つたとは信ぜられない。自分

はスキタイにアジアの影響のあることを否定しない。けれどもこれは遙か近世、世界帝國が、最初アッシリアに於て次にペルシアに於て北方に伸びた時代で、これ以前北方民族の文化は固有のものであつた。

古代世界に於ける製陶法は北ヨーロッパに於て發達せしものと南、東方及び地中海沿岸地方に於て發達せしものと二流に區別なし得る。兩者共に原始的な粗笨な藝術を基本としてをる。

北に於ては之が次第に精巧なものと發達したがその傳統は、たとひ外的影響が加つても依然保持されてゐた。東方に於ては新しい技巧が之に足されて全く舊來の様式を一變してしまつた。即ちそれが未知の地點で發達し、スーズに出現した彩色土器である。然し原始土器は、之と共に併存してゐた。是が最も古代のもので、古代世界の如何なる流派も、スーズ第一期土器、及び第二期土器の最初のものに匹敵するほど古からぬ。従つて自分は、第二期土器が西方の土器に影響したと推察する。



**カルデア及びメソポタミイ** エラムとカルデアとの間にたえず交渉があつた故スーズ第二期土器は確かにカルデアに影響したに相違ない。然し残念ながらカルデアの土器はなほ調査不完全で、明瞭のことは不明である。アツシリアにはエラムのそれと密接な關係を有する彩色土器あり、ニニブにエラム土器の流派が形成されたことは確かである。

**シリアとパレスチン** シリアにもスーズ土器と技巧及び模様のをつくり同じの彩色土器が存してをる。恐らくごく初期にシリア、パレスチンにスーズ第二期土器の中心が生じ、二千年紀にエーゲ文化が更に新しい範を齎したのであらう。

**西亞の北方** ガラテイア、カッパドキア、フリジア、リディア、イオニア等にも土器にエラムの影響が存する。然し是等の地方は調査なほ不充分である。もし將來、組織的の探險がなされたならば恐らく此處にエラムとカルデアに移住した住民の原地を發見なし得るだらう。

**西亞に於て使用せられたる種々の岩石及びその**

**起原地** エジプト人は美麗なる噴出岩をシエーヌ、アラビア、シナイの諸地方より得て使用したカルデア及びエラム人は反對に堅い岩石に乏しく之を遠隔の地より齎した。カルデア及びスーズの遺跡に存する最も著名な結晶岩は、閃綠岩と *Syrite* (玄武岩質綠石) である。テロの遺跡の閃綠岩と *Tolerite* の産地として地質學は一、アルメニア山地とその南方支脈、二、印度、三、紅海沿岸の三箇所を教ふる。その何れが此地方への原料供給地であつたであらうか。カルデアには岩石と共に木材が外國より輸入されてゐたが、當時この原料國とみられるのはリバン、アルメニア山脈、イラン國境山脈である。

文獻を考究するとマガンMagánの地より木材と *Tolerite* とが輸入されしこと、當時西方、リバンとの間に極めて繁き通商路の存在したことが知られるそれが大部分水路であつたことが陸路の困難、運搬物の長大なことによつて察せられる。ユーフラトは舟航に適し、ペルジクまで遡り得る。然し其處まで行かずともアレブArabと同緯度の地點に於てリ

パンとユーフラトと、最短距離を見出だし得る。此處まで大きな材木を人の背や動物によつて牽引して運搬し、筏に組んで下流に流したと推せられる。

カブール河とユーフラト河の合流點より上には火山系の山脈あり、閃綠岩、*dolerite*、玄武岩、粗面岩等の岩石を産する。更に遡るとビレジクの西タウルス山中に眞正の閃綠岩が見出される。是等の岩石が容易に水路によりカルデアに到達なし得たのである。ユーフラトのビレジクより上に森林地帯が始まる。従つてカブールとユーフラトとの合流點とビレジクとの間に含まれる地域が古へのマガン地方に相當する。

今一つの古代カルデア人に種々の木材と金粉とを供給した國メルハは、北はユーフラトに境し、後サルゴン朝にバレスチン、ハウラン、モアブ等の特別の名を受けた地方に相當するらしい。

その他アルメニア、北クルデイスタンの山脈、シナイ、印度の諸地方は同様の産物を生ずるが何れも交通が不便であり、住民は敵對的で、當時カ

ルデアと通商が行はれてゐたといふことは考へられなす(註二)(未完)。

(註一) アンダーソン及び日本支那考古學者の極東に於ける發掘が此境界を遙か東に擴張したことは人の知る所である。此問題について左の諸著を參照せよ。

Andersson, An early chinese culture (pekin, 1923)

Arne, painted stone age pottery from the province of

Ho-nan. China (pekin, 1925).

Andersson, The cave-deposit at sha kuo t'un in Fengtien (pekin, 1923).

Andersson, preliminary report on archaeological research

in Kansu (pekin, 1925).

魏子窩 (東亞考古學會編)

石田幹之助氏「書庫の一隅より」(民族一の三)

なほ昨年殷虛よりも彩色土器が發掘された。

(註二) 印度との關係は、最近モヘンジョダロ、ハラツマに於ける發掘が從來の學說を一變し、兩地古來よりの交通が信ぜられるに至つた。インダスに於ける文化は、前三千年紀の中葉以前に當り、メソポタミアの文化より進んでゐた。ウンマ、ラガシ、ウル、キシに發見される凍石 (*metallite*) の正方形期印は、形、質、模様に於てインダス流域の先史時代都市遺跡に多數發見せられるものと寸分たがはない。キシ・マケイ、びウルの古代墳墓に發見された念入に蝕鏤された紅玉髓の珠

數玉は、メソポタミアには此時代に限られてゐるが、印度で普通であり、長期間使用されてゐる。atUbaid から発見された石製壺の断片は、印度でなほ使用されてゐる凍石製である。印度の方へはメソポタミアから、モヘンシヨ・ダロの防濕層に用ひられてゐる瀝青が輸入せられたらしい。モヘンシヨ・ダロから発見された小像は、古代印度人がスメル人と類似せることを示す。ハラツバから発見されし短剣は、スメルと同様刀根をつけた式に屬してゐる。インダスとスメルの廣口盃 (Beaker) は、疑ひもなく同一系統のものである。モヘンシヨ・ダロより出た銀の圓筒形壺は、ウル、スーズより出た雪花石膏の器と比較することが出来る。スメルとインダスの化粧道具は、大體同様であり、各々頭が環状をなす特殊の構造を有してゐる。貝殻の嵌め込みのやうな藝術的意匠が兩地方を連鎖してゐる。三瓣 (Trefoil) 圓花飾 (rosette) の様な模様、怪物のやうな宗教的題材まで兩地共通である。車輪、荷車も獨立して兩地に發明されたとは考へられぬ。

ハラツバとバルチスタンから出土する彩色土器は、質、技巧、形、裝飾に少しの相違はあれ、スーズより出たものと同一系統に屬する。要するに印度とメソポタミアとの間にはごく古代より直接か或ひは間接に交通貿易が行はれてゐた。モヘンシヨ・ダロは十以上の都市がかさなりあつてをり、その一番最近のもの三つだけが調査されたに過ぎぬ。もしそれより以前のものが、調査せられたならば印度の古代は一層闡明され、あはせて西亞の史前にも新奇の光明をもたらすであら

う。

此處は Child, The most ancient East, (1929) p. 199—206 にある。なほ左の諸著を参照せよ。

The Illustrated London News, 1924, 20th and 27th Sept. and 4th Oct. 1926, 27th Feb. and 6th Mar. 1928, 7th and 14th Jan. Archaeological Survey of India, Ann. Report, 1923—4.

松 本 信 廣